

た。しかし、15カ月間に死亡したのは世界で2万人にも満たず、季節性インフルエンザによる被害の100分の1程度でした。つまり、季節性インフルエンザに備えることこそが重要なのです。

季節性インフルエンザの発症予防、症状緩和にはワクチンが有効ですが、わが国を含む世界の現行ワクチンは、発熱などの反応をほとんど起こさない代わりに、力価（ワクチンの効果）があまり高くありません。

私たちは、今のワクチンより効果が100倍高く、副反応を起こさず、しかもコストの低いワクチン

の開発を進めています。10倍に薄めても、現在のワクチンより10倍強いワクチンができます。

インフルエンザに限らず、ワクチンと治療薬の開発には、病原ウイルスを安全に研究できる封じ込め施設が必須です。感染症共同研究拠点で全国の研究者と共同で開発を進める体制を1日も早く組み、さまざまな感染症の発生に備えることが使命と考えています。

次号（2018年3月号）では「長崎大学臨床検査医学講座」を取り上げます。

## 産学連携で感染症を防ぐ

# キヤノンメディカルと進める ジカ熱の迅速検査システム開発に成功

長崎大学とキヤノンメディカルシステムズ（本社：栃木県大田原市）は、ブラジルなど中南米で流行したジカ熱の迅速検査システムを開発、キヤノンメディカルは1月、医薬品医療機器総合機構（PMDA）に検査キットの承認申請を行いました。

今回、承認申請した検査システムは、熱帯医学研究所新興感染症学分野の安田二郎教授のグループとキヤノンメディカルが共同開発を進めていたものです。2015年から16年にかけて、ブラジルなど南米諸国でジカ熱が大流行した際に、ブラジル連邦共和国ペルナンブコ連邦大学アサミ・ケイゾー免疫病理学研究所（LIKA）の協力を得て、日本医療研究開発機構（AMED）の研究費でジカ熱を迅速に診断できる遺伝子検査システムの開発に取り組みました。新しい検査システムでは、ジカウイルスの遺伝子を従来よりも短時間で検査できることを目

指しています。

安田教授のグループとキヤノンメディカルは、これまでも、感染症の検査システムの開発に取り組んでまいりました。2014年から16年にかけての西アフリカを中心とするエボラウイルス病の大流行の際には、共同開発した迅速診断キットを流行地であるギニア共和国に供与し、現地での運用を指導するなどエボラウイルス病の制圧に貢献しました。

キヤノングループは成長事業の一つにヘルスケア事業を掲げており、キヤノンメディカルが主軸となって、事業を推進していく方針です。同社では、今回の検査システムは、デング熱やチクングニア熱など、蚊が媒介するほかの感染症にも応用できると考えており、今後も長崎大学と共同で、さまざまな感染症診断に有用な検査薬及び検査システムの開発に取り組んでいく方針です。